



今月の題字
星野富弘さん

(みどり市東町出身)

4月28日に逝去された詩画家・星野富弘さんが「一文字しか書けなかった」と申し訳なさそうに言ったことが忘れられません。心からご冥福をお祈り致します。

虹の架橋

検索

で、インターネットからでもご覧いただけます。

ながめ余興場で中村座公演

中村勘九郎十三回忌追善錦秋歌舞伎が十月三日(木) 四日(金)ながめ余興場で開催されます。第一部は中村勘九郎、中村七之助、中村鶴松のトークコーナー、第二部は吉原の年中行事「吉原俄(にわか)」に集まる粋な江戸っ子の様子を廓情緒たつぷりに描いた「若鶴彩競廓景色」、第三部は弁慶、牛若丸、常盤御前が登場する「舞鶴五條橋」を上演。この演目は十七代目勘九郎と十代目勘三郎、八代目勘三郎親子の共演で初演された話題となり、今回は当代勘九郎と七之助、鶴松の共演で蘇る中村座の珠玉の作品です。



中村勘九郎・七之助特別公演
日時 10月3日(木) 13:00開演
10月4日(金) 11:00開演
10月4日(金) 15:00開演
会場は開演60分前 未就学児入場不可
木戸銭 全席指定 1階S席10,000円
2階A席 8,000円
会場 ながめ余興場
出演 中村勘九郎、中村七之助
中村鶴松、中村いてう
中村山左衛門 他
チケットは6月23日10時より全国プレイガイドで一斉発売。



いい話
(文責・靖)《346》

五月三日、前橋キリスト教会で星野富弘さんの葬儀が行われました。パイプオルガンの音色に合わせて讃美歌を合唱し、牧師様が聖書を朗読されました。式の最後、奥様の昌子さんのお礼の挨拶に深く感動しました。

「本日はお忙しい中、夫・星野富弘の葬儀にご臨席いただきありがとうございました。星野富弘は一九四六年みどり市東町に生まれ、群馬大学を卒業し、中学校の体育教師になりましたが

「ながめ黒子の会」は、ながめ余興場の応援団として平成5年に誕生し、平成18年にNPO法人となり、歌舞伎や落語、浪曲や歌謡イベントなど、ながめ余興場を利用したいという人々を応援する縁の下力持ち(黒子)として活動を続けています。ながめ黒子の会では、今賛助会員を募集中!年会費千円でながめ余興場のイベントの先行案内や割引特典などもあります。



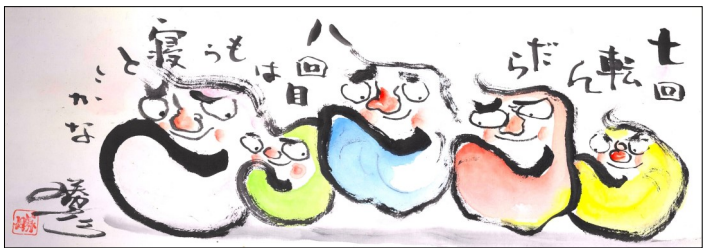
遺言

一九七〇年、部活指導中の事故で手足の自由を失ってしまいました。その苦難を通して神様に救われ、信仰が与えられました。私は入院中の富弘さんと知り合って結婚しました。一九八一年に初めての本『愛深き淵より』を出版し、次に詩画集『風の旅』を出して忙しい生活になりました。(中略)ある時、舟木牧師が訪ねて来て下さり、富弘さんに『昌子さんに遺言を書いたのですか』と聞きました。富弘さんは、『私は絵を描く事、文章を作ることが遺言です』と答えられました。結婚生活は四十二年間になります。その間、たくさんの作品を描きました。

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の絵《346》

大野勝彦さん
『七回転んだら…』



熊本県義手の詩画家大野勝彦さんの作品。「七転び八起き」ではなく、「七回転んだら八回目にはもう寝とこかな」という大野さんらしいユーモアにあふれた言葉が五色のだるまさんの絵に添えられています。頑張ることも必要、頑張らないことも大事と教えられるような気がします。「人生後半が面白い味が出るのはこれから」という大野さんの言葉にも元気をもらっています。

た。作品は私たちの子どものようなものです。私が『子どもがいなくて寂しいかい?』と聞くと『だから絵をたくさん描いたんだよ 子供に手を引かれて歩けるように』と言ってくれました。富弘さんは『ことばの雫』の本の中で『いつか分らないが神様が用意していてくれる本当の私の死の時まで胸を張って生きよう』と書いています。そんな富弘さんの生き姿を見せられつつ病院で一緒に過ごし、私も頑張っと思わされました。

主人が天に還って淋しくなりました。まいりました。が神様に見守られ、皆様の変わらぬ御厚情をお願いして生きて行きたいと思えます。本日はありがとうございました。富弘さんは『ことばの雫』の本の中で『いつか分らないが神様が用意していてくれる本当の私の死の時まで胸を張って生きよう』と書いています。そんな富弘さんの生き姿を見せられつつ病院で一緒に過ごし、私も頑張っと思わされました。



靖ちゃん日記

令和六年五月十日(金) 大間々駅前トイレ掃除が今朝で千四百回目を迎えた。二十七年前、街づくりの勉強会で東京から来た講師に「この所はいいい所だからトイレが汚かった」と言われたのが掃除のきっかけだった。夜の飲み会で「明日の朝から俺達で掃除しよう」と酔った勢いで始めた。あの日以来、大雪の日も台風の日も一週も途切れることなく、八年前の九月九日に千回を迎えた。あの時は宮城県や静岡県や兵庫県からも掃除仲間が来てくれて前夜祭で盛り上がり、翌朝は六時前、三日酔いで三十三人で掃除した。千四百回目の今朝はお茶で乾杯だった。千五百回目は再来年の四月十日。その時には香川県の親友・岡本卓三さんも「金まていれば必ず行く」と早々に名乗りを上げてくれた。今から前夜祭の酔いを楽しみたい。思い起こせば、人生の節目は酔った勢いに駆けられた。四十五年前にプロポーズした時は酔った勢いだったかどうか。忘れた。



風薫る年を重ねて気づくこと

年を重ねると「老いるショック」を実感することもある。若い頃には感じることもなかった四季折々の風にしみじみとした情緒が感じられるようになってきました。当たり前と思っていたことが有難いことであり、偶然と思っていたことが必然だったと気づかされます。全ての出会いや出来事が自分を育ててくれたのだと思います。星野富弘さんの詩に『悲しみの意味』があります。『冬があり夏があり 昼と夜があり 晴れた日と雨の日があつて ひとつの花が咲くように 悲しみも苦しみもあつて 私が私になつてゆく』